

中国語四字格の歴史と研究

藤 野 安紀子

1 序

漢字四字から成る形式、中国語四字格は、“四字格”の他、“四字词”“四字语”“四字句”“四字组合”などとも言われ、多種の研究が行われている。中国語四字格を英語や日本語などの外国語と比較した翻訳研究、四字格の内部構造の分析、ある文学作品や方言に現れる四字格の特徴、その他韻律や修辞、語義、単位、語用論、四字格をいかに指導するかという教学方面の研究などである⁽¹⁾。しかしこれらの中に分析対象として取り上げられている四字格は、辞典に収録されているものもあれば、新語と呼べるものもあり、成語との区別もなされないまま分析の進められているものが多い⁽²⁾。四字格については、《现代汉语词典》第6版で、ピンインの綴り方に変化があった。“风起云涌”のように二つの“双音节”に分けられるものは、ピンインの表記で“fengqi-yunyong”と間にハイフンが入り、“不亦乐乎”のように二つの“双音节”に分けられないものは、“buyilehu”のように繋げて表記されるようになったのである⁽³⁾。

ここでは、四字格を“词”から考察する陸志韦（1956）〈汉语的并立四字格〉⁽⁴⁾、“语素”から考察する周荐（2004）〈四字组合论〉⁽⁵⁾、“字”から考察する徐通锵（2008）《汉语字本位语法导论》⁽⁶⁾を取り上げた。四字格を巡る多種の研究の中で、特に単位の問題の観点から扱うものは、単位の認定が中国語という言語を考察する際の根本的な問題であると同時に、現在なお種々の観点から議論が必要であるという点で注目される。

2 四字格研究における単位の問題について

2-1 三氏の単位の認識について

先にも述べたように、陸は“词”つまり word の概念が基になっており、一方、徐は中国語に word に相当するものはなく、「字 zi」こそ最も基本的な構成要素であるという認識から出発する。また周は、四字格を、形態素、“语素”という単位から考察する。

2-2 並立四字格について

陸（1956）と徐（2008）はともに、中国語四字格の中の並立四字格を論じたものである。陸志

韋は、1950年代初めの中国における構造言語学の吸収と盛行の中で、中国語の特に造語法を研究した。陸（1956）は、“走在路上”“木质坚硬”“能工巧匠”という三つの例を挙げ、声に出して読むときに、前二例が“走在 | 路上”“木质 | 坚硬”と、前後二字の間にポーズが置かれるのに対し、“能工巧匠”の“能工”と“巧匠”の間にはポーズが置かれずとして、“能工巧匠”のような四字格は、統語論からも、造語法からも、特に留意すべきと述べている。そして、「四字の内部組織には更に、中国語の特性が表れている」とし、“能工”と“巧匠”、“能”と“工”、“巧”と“匠”が対であることを指摘した上で、このような四字格を“並立四字格”と呼び、研究対象としている。また“能工巧匠”は、“平平仄仄”という声調から見ても対の構造が明らかである。

一方徐通鏞は、陸の研究から半世紀を経た後に、中国語研究に適合した理論と方法を“字本位”理論として提唱した。徐（2008）は、形・音・義が結合した中国語の基本構成単位である“字”を基礎として四字格の来源を明らかにしている。ここでも、字組の形成は、「1」から「2」に広がり、「2」から「3」と「4」に広がったもので、同型構造の「2」が結合して生成した「4」は重要な構成方式であるとされている。

「1」「2」「4」は中国語の構造の真髄を凝集しており、基本精神は一字「1」音節、「2」音節一フット、「2」フットが一つのリズム単位を生み出すというものである。そのため字、二字組、成語式の四字格は中国語構造で特殊な地位を占めている。（徐（2008））

陸（1956）、徐（2008）ともに、字組の2フット、及び同型構造の「2」が結合して「4」になるという形成過程を述べているが、現代中国語四字格の構造の分析方法については異なったアプローチをしている。陸（1956）が前後二字の語義関係を基礎にして、結合した字の文成分を“動賓・主謂・向心（偏正）・后補・并列”等の型に分けているのに対し、徐（2008）はこれを「インド・ヨーロッパ語の文法理論と方法で中国語を分析したものである」と指摘し、四字格の前後二段の構造が対称・同型の特徴を現す原因を“字本位”の立場から明らかにしている。

2-3 陸（1956）における並立四字格の来源

先述の通り、陸（1956）は、前後二字の語義関係を基礎にして、前後二字が組み合わさってきた四字を“動賓・主謂・向心（偏正）・后補・并列”等の型に分けているが、その分類の前に、並立四字格を、「疊字でない四字並立格」と「疊字の四字並立格」に分けている。「疊字でない四字並立格」とは、“拿糖作醋”や“留心在意”のように四つの異なる字から成り立っているもので、「疊字の四字並立格」とは、“家家户户”や“扭扭捏捏”のように同じ字が使われている四字格である。

陸（1956）は、並立四字格の来源を研究する上で《水浒传》と《红楼梦》を比較しており、《水

浒传》、《红楼梦》に現れる並立四字格がどの程度口語に近いのかについて、現代北京語と比較している。それによると、《水浒传》が並立四字格を用いた例は約2,100回、《红楼梦》が並立四字格を用いた例は約3,970回で、現代北京語と全く同じものは少なく、現代北京語に近いものとなると、少し多くなると説明している。陆（1956）では更に、疊字でない並立動賓格と疊字でない並立名名向心格という型⁽⁷⁾を取り上げており、現代北京語に現存するパーセンテージを示している。

	疊字でない並立動賓格	疊字でない並立名名向心格
《水浒传》	18%	10%
《红楼梦》1-80回	20%	11%
《红楼梦》81-120回	30%	23%

そして、「もし作者がともに口語の例を使っていたら、現存するもののパーセンテージはこんなに少ないはずがない」、「この二作品の中では、疊字の型は疊字でない型より現代の口語に近い。口語でよく使われ文言であまり使われない型では、現存するもののパーセンテージも大きい」としている。

陆（1956）は、《水浒传》と《红楼梦》の資料を大まかに文言・口語の二種類に分けるのは実際に合わないとしながら、文言がどのように白話に入ったかという点を次のように説明している。方言の中には、文言がどのように白話に入っていったか聞いてわかるものがあり、例えば吳方言で“不知不觉”“无千无万”には、読音と口語の二種類の言い方があるという。これが必ずしも文言がどのように白話に入っていったかを知る決め手となるわけではないが、陆（1956）は、この例から経緯を説明している。つまり、「口語に元々この語があった→“说话人”などが話本の字を見てそれに読音をつけた→この読音が口語に入った」というものである。特に、“不知不觉”“无千无万”のように、口語で元々よく使われていた表現は、更に流通しやすかったという。そして、これについては、「話が字の影響を受け、著名な文学作品が言語に影響した。小説・詞・曲には並立四字格の例があるが、これらは当時の口語とは関係なく、後に口語に入ったのかもしれない」とまとめている。陆（1956）はまた、関漢卿の元曲の四字格に触れ、内部構造を現代北京語と比較した結果から「現代方言が並立四字格を運用する大局は、700年前にすでに大体決まっていた」と結論づけている。

2-4 “字本位”から見る四字格の形成過程

徐（2008）は、「同型構造の並列と中国語の成語式“四字格”」という章で、字・連綿字・四字格という過程を明らかにしている。

連綿字は「1」が「2」に分かれ、連綿式の四字格は連綿字の基礎の上で再び「2」から「4」に分かれたものである。(徐(2008))

これは例えば、“啪”という「1」から「2」＝“噼啪”が生成され、さらに「2」から「4」＝“噼啪噼啪”“噼噼啪啪”“噼里啪啦”が生成されるというものである。ここでは、「4」は「1」から転じて出てきた最も長い“固定字組”の形式であるとされる。この、「1」が「2」に分かれ、「2」が「4」に分かれる、という過程が、徐(2008)の“字本位”の立場である。徐(2008)によると、四字格は、初期段階では連綿字と似ていて、それぞれの字が一つの音節を代表するだけでそれ自身に意味はなかった。後にこれを基礎として、意味をもつ字がこの四字格の構造を利用して四字格を形成したという。つまり、意味が音に代わっていき、連綿字の「2」を基礎として分かれてきた語音四字格が、語義四字格のために構造の枠組みを準備したというものである。

「2」も「4」も、ともに「1」がいくつかのレベルを通過した「転」で、「1」が「2」に転じ「2」が「4」に転じて生成したもので、音から義への転化は、成語式の四字格を通して見ることができる重要な生成システムである。(徐(2008))

「字・音節・概念」の一对一の対応は、中国語の基本構造である。しかしこの対応には柔軟性があり、連綿字の構造の型を通して「2」に延びることがある。この、本来は単純な音節である「2」は、また意味をもつ字を取めることができ、語音の「2」を語義の「2」に転化させる。(中略)そしてこの「2」はまた結びつくことができ、「4」の基礎になる。これは中国語の音と義が相互に転化できるコーディングシステム(“编码机制”)を体現している。(徐(2008))

徐(2008)はまた、《诗经》に現れる四字格からもこのシステムを見出しているが、それについても陸(1956)との比較から見ていきたい。

2-5 《诗经》に現れる四字格の解釈について

陸(1956)は並立四字格について《水浒传》と《红楼梦》の比較から始めているため、並立四字格の来源を明らかにする方法として、二つのアプローチをしている。それは《水浒传》から遡る方法と、最古の文献から始めて、四字格がどのように文言に現れたかを見る方法である。そのため陸(1956)は《诗经》に現れる量字の並立四字格を分析しており、また一方の徐(2008)でも《诗经》に現れる四字格が分析対象となっている。

陆（1956）によると、《诗经》には並立四字格の例が557回現れたという。現代語の各種の類型は《诗经》の中に現れており、これらの例から並立四字格の来源が理解できる。陆（1956）は、これが当時の口語の造語法なのか或いは文言を縮写したものなのか、《诗经》の典型は四字一句ではあるが、誰も当時の中国語はどう話されていたのか、民歌はどのように歌われていたのかはわからないとしている。しかし例を疊字の四字格と疊字でない四字格とに分けると、特別な現象が現れると述べている。それは、疊字でないものの例が少なく、これは《水浒传》、《红楼梦》と全く異なるという点である。

陆（1956）はまず、現代語における疊字の四字格を背景として述べている。

甲甲乙乙：構成が最も緊密で、語としての性質が最も強い型。（例：“家家户户”“里里外外”）
甲乙甲乙：単独で使える。特に“唱啊，唱啊”“还有，还有”は語になっているとさえ言えない。

甲乙甲丁：大多数は、二つの甲が、「有×有×」「没×没×」「不×不×」「又×又×」のようなセットを構成する。“并立双音词”の二つの成分を入れれば、一つの語になる（例：没头没脑）。“双音词”を成さない字を入れると、語にならない。この型を広げて、“多音词”、或いは“词组”、或いは“短句”を入れれば、四字格でなくなる。（例：“有椅子，有沙发”“不这么稀松，不这么随随便便的”）

甲乙丙乙：甲乙丙乙にも、セットをなすものがある。字を入れるのは甲乙甲丁ほど簡単ではないが、字が入れられないわけではない。言語習慣がないだけで、このような習慣があれば、語になる。（例：“心服口服”は語。もし“心服嘴服”が口語にあれば、語と見なされる。もしある言語の環境で“心焦口焦”が見つければ、新語である。）

このような背景から《诗经》の疊字格を見てみると、語としての性質が最も強い甲甲乙乙の格は5.8%の割合で出現し、また甲乙甲乙・甲乙甲丁・甲乙丙乙という疊字格では、「現代語で構成が最も緊密でない型に最も近い」としている。例えば「甲乙甲乙」格は、現代語の「唱啊，唱啊」「老王，老王」にあたり、「甲乙甲丁」「甲乙丙乙」格は、現代語の“セットを作る型”、「甲×甲×」「×乙×乙」に近く、二つの字を入れると語になるものである。しかし陆（1956）は、これが必ずしも四字格ではないという。シンタックスの上では、これは二つの多音成分を入れるのと違いがなく、また「我々はそれが民歌の元々の型であると肯定できない」。つまり詩を削って四字にしたということもあり得るというのである。また先述した、文言がどのように口語に入っていたかという点で「疊字でない四字格は口語に入りにくかった」と指摘されているが、《诗经》の四字格からの分析でも次のように述べられている。

疊字格に二つの字を入れるのは、疊字でない四字格を作ることほど難儀ではない。文法ではすでに疊字のセットの型が存在しており、そこに二文の駢儷文を割り込ませれば並立の四字ができる。疊字でないものはこのように縮めることができず、言語に必ず二つの対をなす双音成分がある。(陆 (1956))

このように、《诗经》に現れる四字格では、疊字の四字格の方が、疊字でない四字格よりも多いことがわかっている。東周末期になると、次のような種類の疊字でない四字格が現れたという。《离骚》と《九歌》に現れる“屈心（而）抑制（兮）”⁽⁸⁾のように、中間に虚字（ここでは“而”）の入る型や、《天问》の「勤子屠母」⁽⁹⁾のような型である。

中間に虚字があるものとなないものと、一体どちらが古漢語の言語の型なのだろうか。もし緊密な型であるのなら、「離騷体」で勝手に四字格を崩すことはできない。四字格を崩すことができれば、現代語の疊字でない並立四字格ではなくなってしまう。もし言語に元々この型がなかったのなら、《诗经》の四字格は文言を縮写しただけのものであるということになり、《天问》が用いているのは文言体だと考えられる。しかしこれは、古漢語に並立四字格があるはずがないと言っているのではない。“东西南北”“明明暗暗”のような例は、元々このような形で言っていなかったと想像することはほとんど不可能で、当時すでに造語格になっていたものと思われる。(陆 (1956))

一方の徐 (2008) も、中国語に早くから四字格の構造があり、《诗经》《尔雅》に現れる構造の型は四類に分けられると述べている。なお、徐 (2008) の ABCD は、陆 (1956) の甲乙丙丁に相当する。

AABB 例：委委佗佗 战战兢兢
 ABAB 例：委佗委佗 式微式微
 ABAD 例：将翱将翔 如切如磋
 ABCB 例：颀之颀之 恩斯勤斯

この四種の型は、全て連綿字の構造である AA と AB が変わった形で、第一類の AABB は AA 式が重なったもの、第二類の ABAB は AB 式が重なったもの、第三類の ABAD は一字目と三字目が AA 式の重言で、二字目と四字目が AB 式の双声或いは疊韻、第四類の ABCB は一字目と三字目が AB 式で双声或いは疊韻、二字目と四字目が AA 式で重言である。

これらはほとんどが事物の性状を描写する必要から造られた「擬音」と「擬態」の言語形式で、多くが詩賦の創作に運用され、連綿字の運用範囲にほぼ相当する。(徐 (2008))

そしてここからも徐 (2008) は、このような「1」から分かれて「2」になり、また「2」から分かれて「4」になる構造は中国語の重要な特徴で、「2」であろうと「4」であろうと核心は依然として「1」であり、「4」は「1」から転じて出てきた最も長い“固定字組”の形式であると述べている。

3 “词”、“语素”と“字本位”理論

3-1 陸 (1956) における結論

陸 (1956) は、並立四字格の来源について次のように結論を出している。

疊字でない並立四字格は、元々は文人が縮写したもので、後に口語に入り、四字の形を崩すことができず、口語の語になった。疊字の四字格では、甲甲乙乙が早い造語の型であった。甲乙甲乙・甲乙丙乙は、縮写、或いは二つの言葉を重複して言ったもので、現在に至るまで、語と認められる例は少ない。甲乙甲丁は、元々は縮写で、二つの言葉、二つのフレーズに元々重なっている部分があるため、疊字でない甲乙丙丁より縮写しやすい。この重なっているセットに単音成分を入れれば四字格が崩れなくなり、語になる。現代語の「不×不×」、「可×可×」のようなセットはこのように生まれたが、現在に至るまでそれらの語としての性質は疑わしい。(陸 (1956))

陸志韋の論文では、翌年の《汉语的构词法》⁽¹⁰⁾ にも見られるように、“词”の認定の問題が大きなテーマであった。以下は、陸 (1957) の第一章「造語学の対象と手続」にある、シンタックスと造語法から見た二つの部分の前後関係である。

	シンタックス	造語法
前部が後部を修飾する	王先生昨天买的／帽子	礼貌
後部が前部を補う	打得／他满院子乱窜	击败
前後が並列	一个人／一匹马	弟兄
前部が動詞、後部が目的語	说了／好些话	注意
前部が主語、後部が述語	他／写字	口快

陸志韋の論文で“词”の認定の問題が大きなテーマであったことは先にも述べた。構造言語学

では、単位認定の問題（音素・形態素・語等）が最初で、意味は正面からは取り上げなかったためである。陸（1957）にも、「どうすれば一方がシンタックスの構造で、一方が造語の構造だとわかるのか。それは意味が決めるのではない。“词”を認識しようとするならば、重要なのはその内部構造に基づくことだ」とある。陸の四字格の考察は、文法的な面においては、こうした造語法の見解に基づいた語の認定の問題が核心であるといえる。先に述べた、現代語における疊字の四字格や《诗经》に現れる疊字格の分類の中で、「語である」「語にならない」という表現が見られるのは、このためであろう。四字格を疊字の四字格と疊字でない四字格に分けたことや、疊字の四字格の甲甲乙乙・甲乙甲乙・甲乙甲丁・甲乙丙乙という形式からの分析など、意味よりもまず形式という構造言語学の方法を中国語の中で追及した陸志韋のアプローチは、“字本位”理論にも、“語素”つまり形態素からのアプローチにも影響を与えている。

3-2 四字格研究における“語素”

周（2004）は、四字格をいくつの“語素”から構成されているかによって分けている。四字格には、一つの“語素”から構成されているものから、四つの“語素”から構成されているものまでである。一つの“語素”から構成されているものには、例えば“布尔乔亚”“阿弥陀佛”がある。これは、“布”“尔”“乔”“亚”のそれぞれに意味はなく、“布尔乔亚”という四字になって初めて意味をもつものである。二つの“語素”から構成されているものには“阿拉伯人”や“白金汉宫”などがある。これらは、“語素”で分ければ“阿拉伯／人”“白金汉／宫”となる。“阿拉伯”は三字で意味をなすが、“人”は一字で意味を持つ。同じように三つの“語素”から構成されている例には、“阿鼻／地／狱”や“八／面／玲珑”などがある。四つの“語素”から構成されているものは、四字が何分されるかによってさらに分類される。四分される例には“轻重缓急”や“生老病死”の“1 + 1 + 1 + 1”のパターンしかないが、三分される例には“言外之意”の“2 + 1 + 1”と“掉以轻心”の“1 + 1 + 2”の構造があり、二分される例には“不怎么样”の“1 + 3”、“被选举权”の“3 + 1”、“长篇小说”の“2 + 2”構造の三種類がある⁽¹¹⁾。周（2004）でも、この「二分されるもの」の中の“2 + 2”構造は、前部二字と後部二字との関係から、修飾被修飾、主語と述語、“兼语”などに分類している。また、いくつの“語素”から構成されているかと相対する項目として、“巴巴结结⁽¹²⁾”のような、同じ漢字を重ねるものが立てられている。これは陸（1956）において、「疊字でない四字並立格」と「疊字の四字並立格」が区別されていることと繋がる。

周（2004）ではさらに、構成する“語素”の数から、四字格が“词”か“固定短语”かという問題が出てくるとされている。周（2004）によれば、“語素”の数と四字格の単位の関係は次の通りである。

- 《現代漢語詞典》所収の“四字組合”の中で、
- 一つの“語素”から成るもの：例外なく“詞”と見なされる。
 - 二つの“語素”から成るもの：“詞”と見なされるものもあれば“固定短语”と見なされるものもある。
 - 三つの“語素”から成るもの：“詞”と見なされるものもあれば“固定短语”と見なされるものもある。
 - 四つの“語素”から成るもの：大多数が“固定短语”と見なされる。少数、“詞”と見なされるものもある。

四つの“語素”或いは五つの“語素”から成る語彙性の単位は、“語素”の多少が“詞”か“固定短语”かを決める要素となるのではない。鍵となる要素は、その単位を切った後の二つの成分が、独立して自由に動けるか否かという点である。分けた後に、二つの構成要素（或いは少なくともその中の一つの構成要素）が独立して自由に動けなければ“詞”と見なされ、動ければ“固定短语”と見なされる。（周（2004））

“語素”が二分されるものの中の“2 + 2”構造を、前部二字と後部二字との関係から、修飾と被修飾、主語と述語、“兼語”などに分類するという方法は、構造言語学のアプローチである。しかし四字格を“語素”から分析することで、それが“詞”であるかどうかという点を問い直す観点は、文や文章における四字格自体の立場を決める大きな問題に繋がる。四字格については様々な研究があるが、まず“詞”“字”“語素”“固定短语”といった単位の認定についての問題を四字格研究の出発点として認識して取り組むことが必要であり、そうしてこそ、翻訳や文学作品、方言、音韻、修辞、教学方面などの四字格研究の成果も得られるのではないだろうか。

3-3 徐（2008）における並立四字格の形成過程

《詩經》の四字格の分析は先述したが、徐（2008）には「現代中国語は古代中国語から変わってきたもので、その構造の特徴は上古まで遡ることができる」という記述があり、本節では徐（2008）における並立四字格の形成過程を整理する。

二字組の並列関係の最初は連綿字の構造の枠を借りて形成された。四字格の構造も連綿式の四字格と密接な繋がりがあって、コーディングシステム（“编码机制”）の構成原理を含んでいる。これは音義関連の、語義の核心をはっきりと表している。（徐（2008））

昔から今まで、言葉の表現形式には多くの変化があったが、構成のシステムは堅固で、依

然として言語の使用を支配している。このような連綿式の四字格はその中の一種の表現形式に過ぎない。(徐 (2008))

成語式の四字格の形成は、意味を持つ字が連綿字の構造に入って「1」が「2」に分かれ、「2」が「4」に分かれた結果で、音と義の相互転化システムの具体的な表現である。そのためその構造には連綿字の痕跡がある。(徐 (2008))

上記の「コーディングシステム」「構成のシステム」とはつまり、一つの「字」があり、それが連綿字として二字になり、さらにその連綿字の二字が四字になる、というものである。そして元々「声」の分化であったものが、構造の「声」の場所に「義」が入ることで、「声」から「義」への転化が起こる。徐 (2008) は、「義」が「声」に代わった後の連綿字の痕跡を、次のように説明している。ABAB 式の構造は、一字目と三字目が A で同音、二字目と四字目が B で同音、一字目と二字目が AB で双声或いは畳韻、三字目と四字目が AB で双声或いは畳韻、そのため一・二字目と三・四字目が AB・AB で構造が同型である。義が声に代わってこの連綿式の構造に入ってもコーディングのシステムは変わらず、次のような構造を維持している。

1 と 3 が同義

2 と 4 が同義

1 と 2 の語義の構造が同型

3 と 4 の語義の構造が同型

1・2 と 3・4 の語義関係が同型

四字格の語義関係の核心は、限定関係⁽¹³⁾・引導関係⁽¹⁴⁾の二字組が結びついて、これを並列関係にし、並列或いは結びついた同型構造を形成するという点にある。これがおそらく四字格の前後二つの部分の構造が対称・同型の特徴を現す原因である。そのためインド・ヨーロッパ系言語の文法構成の法則で中国語を分析すると、四字格は法則を理解するのが難しくなる。(徐 (2008))

また、この他の構造、“吃吃喝喝”“三三两两”のようなものは、基本的にはこれと同じで、異なる点は、これが重言式の「2」が延びて四字格の「4」になったというところにあるだけであるという。

徐 (2008) は、中国語の語(字組)の形成過程と同じように、表音の四字格から成語式の表意四字格までにも発展の過程があると述べている。当初は表音四字格から出てきた四字格の構造も双声・畳韻の制限を受けていたが、その後連綿式構造の束縛を抜け出し、完全に字義の異同を基

準として、同義・同型の構造を結びつけて並列関係の四字格を生成するようになった。このような字組の語義は幅をもつことができ、特殊な表現の機能がある。それゆえ中国語社会の心理意識では強固な構造であり、コミュニケーションが必要としさえすれば、運用して新しい連合式四字格を創るという。例えば、「4」の型に基づいて、歴史に伝わってきた字句を改造し、四字格とするもの（例：“得陇望蜀”“剑拔弩张”）や、「4」の形式に基づいて古い書籍の辞句を一部分切り取って四字構造を作るもの（例：“美不胜收”“水泄不通”“价值连城”“口若悬河”）、表現の必要から、並列関係の語義の構成の法則に基づいて新しい四字格を作るもの（例：文革期の“斗私批修”“兴无灭资”“上挂下联”）である⁽¹⁵⁾。そして、中国語は、語義の法則で語義の構造の形式を解釈しなければならないとまとめている。

3-4 “字本位”理論における中国語四字格と“表达论”

先述の通り、陸志韋は構造言語学を基に、特に造語法を研究した。陸（1956）では「能工」の対の構成を指摘して並立四字格を取り上げ、四字格の構造では、前後二字の語義関係を基礎にして、結合した字の文成分を“动宾・主谓・向心（偏正）・后补・并列”等に分類している。また四字格を疊字の四字格と疊字でない四字格とに分け、現代中国語における四字格を整理した上で、《诗经》に現れる四字格から四字格の来源を探っている。徐通鏞は、インド・ヨーロッパ語の文法理論と方法で中国語を分析するという構造言語学の方法そのものに疑問を呈してはいるが、伝統的な研究による成果をも吸収した上で字本位理論を提唱している。徐（2008）に次のような記述がある。

疊字でない四字格は、先秦にすでに出現しており、すでに、意味を持つ字が表音の型を利用して成語式の四字格を造り始めていたが、当時数は少なかった。このような「疊字でない」四字格は、現在すでに四字格の主流になっており、声義転化のコーディングシステムが四字格の形成と発展を促進し、中国語の表現の機能を豊かにした。（徐（2008））

つまり、疊字でない四字格が増えたというのは「声」から「義」への転化により表現の機能が多くなったことを証明しているというわけであるが、このように、四字格についても「義」が「声」に代わる過程などは、陸（1956）に見られる疊字の四字格と疊字でない四字格とに分けるという観点を吸収した上で分析がなされたものと言える。また疊字でない四字並立格“拿糖作醋”や“留心在意”、疊字の四字並立格“家家户户”はいずれも“平平仄仄”という声調であるが、四字格における声調の問題も、構造言語学を基にした陸志韋の造語法研究から、徐通鏞の「1」から「2」へ、「2」から「4」へという観点への変遷を考える上でのアプローチの手段になるであろう。

4 結 語

徐通鏞の四字格研究は、“字本位”理論の中で扱っているため、徐（2008）でも“结构论”つまり構造論の中で論じられており、“表达论”（表達論）では論じられていない。徐（2008）では四字格の語義について次のように述べられている。

中国語四字格構造の核心は、並列関係でない字組の「2」を結びつけて並列関係の「4」を生成するということである。この原則は中国語四字格の「妖魔鬼怪、酸甜苦辣、魑魅魍魎、牛鬼蛇神、吃喝嫖賭、奸淫擄掠、烧杀抢夺…⁽¹⁶⁾」のような現象が少ない原因であると解釈することもできる。それはそれらに元々結びつく性質があるためである。このような同じ意味の四字が結びついた四字格にはもう一つ特徴がある。それは多く貶義を表すことである。要するに、語義の法則で中国語の四字格を解釈することは、現在流行している文法の構成法則よりも簡単で、解釈できる力もある。（徐（2008））

陸志韋は“词”、word から、周薦は“语素”から、徐通鏞は“字”が基本的な構成要素であるという概念から出発しており、単位の認定が四字格研究においても根本的な問題であることを明らかにしている。徐通鏞の研究は陸志韋の研究を踏まえて捉えられるべきだが、徐通鏞は“字本位”という枠組みの中で、四字格という中国語の特徴的な言語形式を明確に分析したという点で、注目される。徐通鏞は、中国語四字格は語義から分析すべきと述べているが、声義転化のコーディングシステムによって表現の機能が豊富になった四字格を、“表达论”の中でどう扱うかということが、徐通鏞の四字格研究を活かす課題であるといえる。さらなる課題として、四字格研究史における“语素”の立場を明確にする必要があるだろう。四字格中のある字が意味を持つ可否が問題となる“语素”からの分析が、“词”から“字”への変遷の中にあるものとして捉えられるべきなのか、またはその両者と別のところで捉えられるものなのかという点について注目していきたい。

注

- （1） 藤野安紀子「成語研究と比較した四字格研究の特徴」（『中国文学研究』第38期、早稲田大学中国文学会、2012）では1994年から2011年までの四字格研究162編を11種類に分類しており、その結果は、翻訳84編、構造22編、文学15編、方言15編、音韻8編、修辞6編、語義4編、単位3編、語用2編、教学2編、外国語との比較1編であった。
- （2） 藤野（2012）。成語辞典の収録基準から成語には出典のあることがわかるが、実際には、先行研究には、四字格の中に成語があるという考え方と、成語の中に四字格があるという考え方の両方があり、整理がなされていない。
- （3） 《现代汉语词典》第6版凡例より。

- (4) 陆志韦〈汉语的并立四字格〉(《语言研究》第一期、北京科学出版社、1956)。
- (5) 周荐〈四字组合论〉(《汉语学报》2004年第一期、商务印书馆)。
- (6) 徐通锵《汉语字本位语法导论》(山东教育出版社、2008)。
- (7) 「疊字でない並立動賓格」とは、「拿糖作醋」や「留心在意」のように、四字が異なる並立関係で「拿(動詞)糖(目的語)作(動詞)醋(目的語)」のようにになっているもの、「疊字でない並立名名向心格」とは、「銅牆鐵壁」や「狼心狗肺」のように、四字が異なる名詞の並立関係で「銅(修飾語)牆(中心語)鐵(修飾語)壁(中心語)」のようにになっているものである。
- (8) 目加田誠 訳『中国古典文学大系 第15巻 詩經・楚辭』(平凡社、1969) より
「屈心而抑志兮 忍尤而攘詬 伏清白以死直兮 固前聖之所厚
じつと堪えて志をおさえ とがめを忍び恥をこらえ 潔白を守って忠直に死ぬるのは もとより前代の聖王の重んじたところだ」
- (9) 目加田 (1969) より
「啓棘賓商 九辯九歌 何勤子屠母 而死分竟地
啓は夢に天に昇って 九弁の九歌の樂を得た なぜにこの賢子が母を屠って生まれ
母の身は裂けて地上の石となったのか」
- (10) 陆志韦《汉语的构词法》科学出版社、1957。
- (11) 布尔乔亚：ブルジョア
アラ伯人：アラビア人
白金汉宫：バッキンガム宮殿
八面玲珑：八方美人
言外之意：言外の意味
掉以轻心：油断する
不怎么样：たいしたことはない
- (12) 巴巴结结：やっとのことで
- (13) 修飾と被修飾の関係で、“偏正”とも言われる。
- (14) 徐 (2008) によると、中心である被修飾語から修飾語に広がる限定関係と反対に、後ろに向かって広がる現象で、“打鉄”のように、“鉄”が“打”の対象である場合と、“打拳”のように、“拳”が“打”という行為を行うための方法である場合があるとされる。
- (15) 得陇望蜀：隴の地を手に入れたら蜀の地が欲しくなった。欲望はとどまるところのないものである。
劍拔弩張：一触即発
美不胜收：立派なものが多すぎて全てを見きれない
水泄不通：水も漏らさないほど警戒が厳重である／ぎっしり詰まっている
价值连城：非常に貴重
口若悬河：立て板に水
斗私批修：私心と闘い、修正主義を批判する。
兴无灭资：ブルジョア意識を打破し、プロレタリア意識を高める。
上挂下联：上にも下にも関係を結びつける
- (16) 妖魔鬼怪：妖怪や悪魔。悪人のたとえ。
酸甜苦辣：人生の苦楽や幸不幸のたとえ。
牛鬼蛇神：妖怪変化。悪人のたとえ。
吃喝嫖赌：飲・食・女・賭博の道楽
奸淫掳掠：強姦し略奪する
烧杀抢夺：放火や殺人をして強盗略奪する